集団保育の適齢期に関する研究

横浜恵三子

乳児は最初、母親と対人関係を結ぶが、身心の発育と共に、母親との一対一の関係の輪を広げて、同年齢の仲間や、他の成人との人間関係を成立させていくことにより、しだいに豊かな社会性を身につけていく。健全なパーソナリティを形成するには、乳幼児は何歳頃から集団保育を受けるのが望ましいのであろうか。

実際、保育所においては、産休あけの四三日目から、あるいは三ヵ月や六ヵ月から乳児保育を開始しているし、幼稚園においては、三歳、四歳、五歳からそれぞれ就園させているが、集団保育を受ける年齢は、個々の子どもによって非常にまちまちである。

家庭保育と集団保育の論争においても、その一つの焦点は、乳幼児の就園時期である。Moore, R.S. と Moore, D.N. は彼らの著書「Better Late Than Early, 1975」において、八歳までは家庭教育のみを行なうのが望ましいと述べている。家庭は社会の核(core)であり、多くの子どもにとっては、両親との正しい、愛情に満ちた一対一の関係から学ぶことが、将来のより大きな成長にとって重要であると、彼らは考えており、保育所や施設は、全体の二〇～二五%を占める何らかの問題児(the handicapped, the disadvantaged, the deprived)や、経済的理由から、母親が働かなければならない子どもたちのためにやむをえず必要な存在であるとみなしている。

他方、保育所と家庭は、それぞれ質の異なる生活の場であって、子どもの発達にとってそれらはいずれも大切であるという理由で、乳児期からの集団保育を積極的に保障すべきだとする意見がある。(金田利子、一九七三)

特に金田は、乳児同志の関係が四ヵ月からはじまることを観察し、乳児保育において対人交渉が可能なことを示唆した。また、

仲間の刺激を受けることによって、個々の子どもの発達（特に、課業と生活習慣の形成）は著しく、乳児期からの集団経験は、より充実した幼児期の前段階として、必要なプロセスであることを指摘している。

Mooreの場合は、多少とも理想論に近い見解だといえる。彼らが述べるように、自分の子どもに、豊富な生活経験を与え、かつ、確固たる教育観を持って、八歳になるまで、家庭で教育ができる両親は、実際にはほとんどいないのではないだろうか。子どもは、ある程度の年齢に達して、集団適応能力が発達してくると、集団の中に入れられるべきであろう。集団の中で、子どもたちは、両親が家庭で教えることのできない、様々の経験をするし、互いに刺激し合うことによって、より大きく成長するからである。

金田の場合は、おもに乳児保育の効果を強調しているが、乳幼児の集団適応能力という問題も考えられるべきであろう。集団保育を受けるということは、母親と長時間離れ、見知らぬ場所で、見知らぬ人に出会うことを意味する。見知らぬ場所にひとりで置かれた場合に生じる不安を容易に克服し、適応することができてこそはじめて集団保育の効果が生きてくるのである。不安が大きい場合には集団保育の経験が、将来のパーソナリティの発達にマイナスの影響を及ぼすことも考えられる。

集団保育の適齢期を知るために、実際の保育場面における観察研究（I）と、実験場面における観察研究（II）を行なった。まず、観察研究（I）について述べよう。

I、実際の保育場面における観察研究（I）

新入園児の入団当初の不安と適応過程を調べるために、一九七五年四月から、一九七七年七月までの間、6ヵ月から36ヵ月までの保育所児43名と、36ヵ月から48ヵ月までの幼稚園児18名について観察した。

入園時にみられる不安反応は、母親との分離不安、見知らぬ場所や見知らぬ子どもや大人に対する不安であった。不安反応としては、「分離不安」と「観察者（見知らぬ人）への不安」、適応性反応としては「観察者（週一度、子どもたちに会うので、しだいに見知らぬ人ではなくなる）に対する愛着性」「保育所や幼稚園に対する適応性」の以上四つの局面からチェックリストによって観察した。

図―1は、入園3ヵ月間の分離不安、図―2は、保育所や幼稚園に対する適応性について、それぞれの変化を年齢別にあらわしたものである。いずれの場合も、得点化に際しては、行動としてあらわれる反応には3点、やや消極的で主に顔の表情にあらわれ

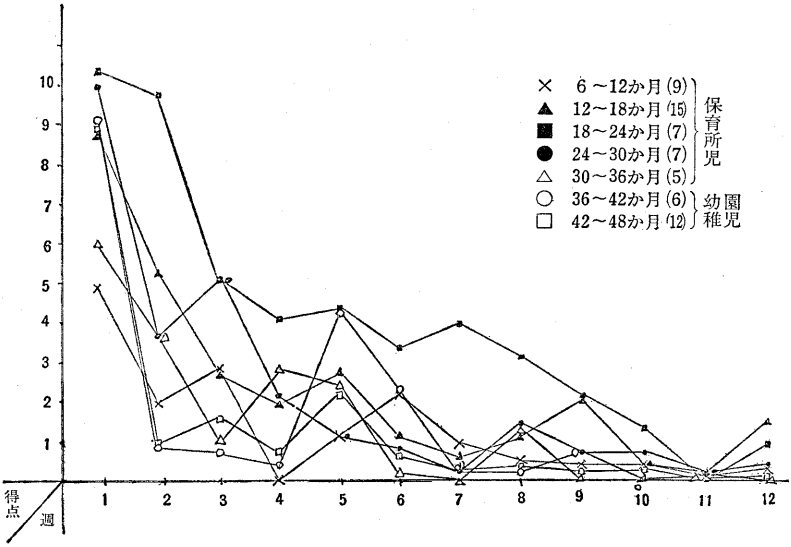

図1　分離不安反応の変化

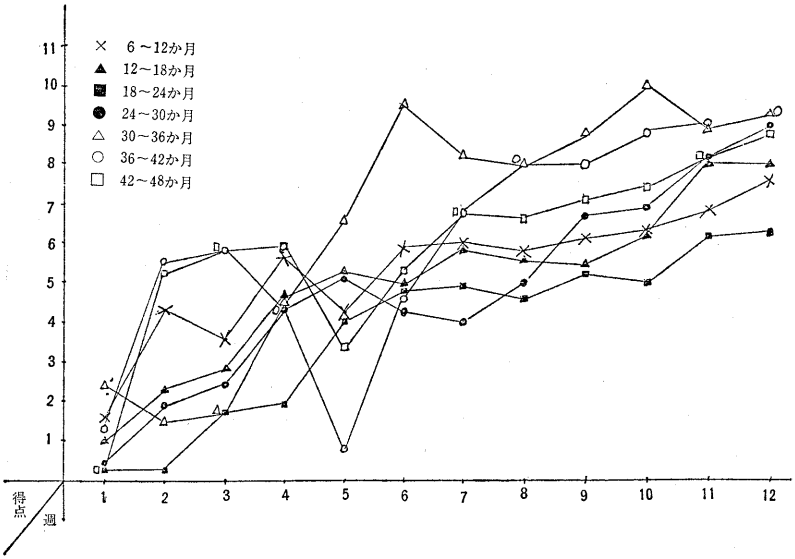

図2　保育所・幼稚園に対する適応性反応の変化

る反応には2点、消極的で反応があいまいなものには1点を与えた。分離不安項目としては、「母を呼ぶ」「母を追う」「少し泣く」「強く泣く」に3点、「チック」「不安な表情」「指をくわえる」に1点をそれぞれ与えた。保育所や幼稚園に対する適応性項目としては、「入室してほほえむ」「楽しく積極的にあそぶ」に3点、「安定しておちついている」「保母とつながりができる」に2点、「静かにあそぶ」に1点をそれぞれ与えた。

図―1において、分離不安の得点が、1以下になる時期を、一応乳幼児がおちつきをみせはじめた時期と解釈して、年齢別に調べてみると以下のとおりであった。すなわち、6～12ヵ月児は4週目、12～18ヵ月児は7週目、18～24ヵ月児は11週目、24～30ヵ月児は6週目、30～36ヵ月児は3週目、36～42ヵ月児と42～48ヵ月児は共に2週目であった。

図―3と図―4は、それぞれ、前半（1～6週）における分離不安得点と、後半（7～12週）における保育所や幼稚園における適応性得点の平均を年齢別に示したものである。1～6週目までの分離不安と、7～12週目までの適応性との間には、1％の有意性で負の相関関係が認められた。（r＝－0.58）。すなわち、入所初期に不安の大きかったものは、2、3ヵ月たっても、よい適応を示さなかったといえる。さらに、分離不安が最も強く、適応性が最も弱いのは、18～24ヵ月児であり、次いで、12～18ヵ月児と24～30ヵ月児であった。6～12ヵ月児に関しては、分離不安得点も、適応性得点も低かった。30～36ヵ月児、36～42ヵ月児、42～48ヵ月児はいずれも、年少児たちに比べて、分離不安得点は低く、適応性得点は高かった。

以上の結果は、2歳半を境として、年長児は、母親との分離不安を短期間で克服して見知らぬ場所に早く適応するが、年少児は、遅いことを示している。特に、18～24ヵ月児に関して、適応が最も困難であった。

G. Heathers（一九五四）は、見知らぬ婦人につれられて、他の見知らぬ子どもたちと共に、車でナースリースクールにつれていかれる時に示す、2歳児（男児17名、女児14名）の適応について調べた。彼は、2歳児を年少と年長に分けて不安反応を調べたが、年長の方が年少よりも早く適応した。その理由として、彼は環境適応能力、状況理解能力が2歳半以後に発達することをあげた。この度の研究でもこのことを裏付ける結果が得られた。

「観察者への不安」と「観察者に対する愛着性」についても、「分離不安」や「保育所や幼稚園に対する適応性」と同じ手続で、年齢別に分析した。入園初期においては「見知らぬ人」であった観察者も、週一回子どもたちと会っているうちに、しだいに「見

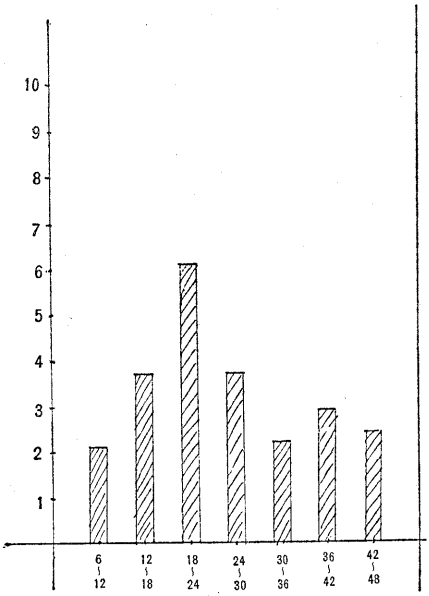

図3　前半の分離不安得点の平均

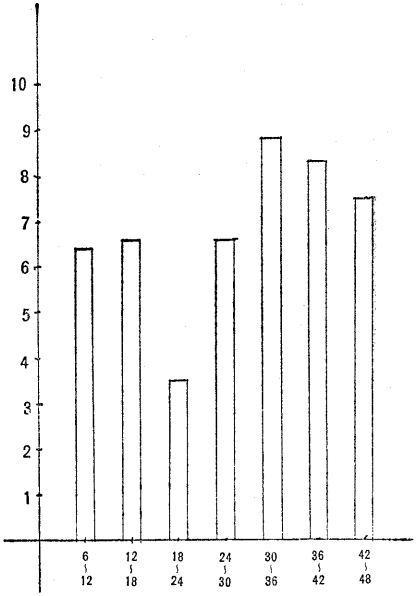

図4　後半の保育所・幼稚園に対する適応性得点の平均

知らぬ人」ではなくなり、3ヵ月後には不安反応が消失して、愛着性が示されるようになった。観察者に対する反応の場合も、18〜24ヵ月児が最も多くの不安を示し、愛着性が形成されにくい傾向がみられた。全体的傾向としては、入園後7週目から12週目にかけて、観察者に対する愛着性が顕著に示されるようになったが、その期間中、最も顕著であったのは、30〜36ヵ月児であった。また、2歳を境に年長児の方が年少児よりも、愛着性を強く示した。

II　実験場面における観察研究（II）

実際の保育場面で観察された不安反応についての年齢差をさらに確認することを目的として、一九七七年七月五日から八月一日まで、12ヵ月から53ヵ月までの保育所児56名（男児30名、女児26名）を対象に、見知らぬ場所への不安、見知らぬ人への不安、見知らぬ場所で一人残されることによる不安、について実験を行なった。

実験手続は以下のとおりである。

（1）被験児は、既知の実験者A（女性）と手をつないで、おもちゃと大人用のいすがおいてあるプレイルームに入室する。

（2）実験者Aは「おもちゃであそんでごらん」といって、被験児をあそばせる。（3分間）

(3) 実験者Aは、「ちょっとまっててね」といって退出する。

(4) 被験児は一人のこされる。(3分間)

(5) 実験者B(男性、見知らぬ人)は入室する。「おはよう」と戸口で声をかけてほほえむ。

(6) 実験者Bは、被験児にほほえみながら近づく。

(7) 実験者Bは、被験児の右手をとって「こっちへいらっしゃい」という。

(8) 実験者Bは、「だっこしてあげよう」といって、被験児の両わきに手を入れる。

(9) 実験者Bは、ひざの上に被験児をすわらせ、「ここ、すき」ときく。(3分間)

(10) 実験者Bは、被験児をおろして退室する。

(11) 被験児は一人のこされる。(3分間)

(12) 実験者Aが入室する。戸口で「○○ちゃん、帰りましょう」と声をかける。

これら12の場面を、一方視の窓を通して隣室から観察し、子どもの反応を積極的な適応反応〔5〕から、明確な不安反応〔1〕まで5段階評定した。

場面(4)と(1)の見知らぬ部屋に一人で残される場合の評定結果は図—5に示されている。

一回目に一人で残された場面(11)においては、年少児ほど不安を多く示している。しかも、一回目と二回目の差も、12〜18ヵ月児と18〜24ヵ月が著しく、年少児ほど、場面(1)から(10)までの不安場面において、容易に回復しにくいようなショックをうけることが明らかであった。実際、年齢が低いほど、どの場面においても不安が強く、2歳以下の被験児は、場面(11)においてほとんどが泣いた。場面(5)から(9)までの見知らぬ人(男)への不安場面における反応の平均を示したものは図—6、場面(1)から(11)までの見知らぬ場所への不安場面における反

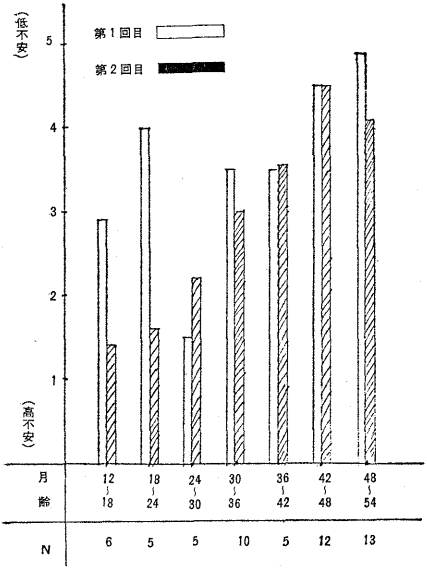

図5 見知らぬ部屋に1人で残される反応(保育所児のみ)

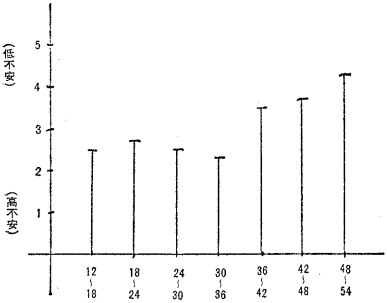

図6　見知らぬ人（男）に対する反応

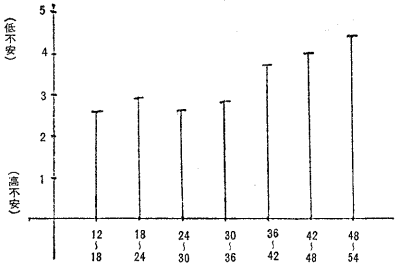

図7　見知らぬ場所に対する反応（場面(1)〜(11)までの平均）

応の平均を示したものは図―7である。いずれも、3歳以下の被験児において、著しい不安反応がみられた。

「見知らぬ場所への不安」、「見知らぬ人への不安」、「見知らぬ場所に一人でのこされることによる不安」、の3つの不安は、年齢によって、その強度が著しく異なった。図―8は、全場面の反応を年齢別にグラフで示したものである。見知らぬ人が退室する場面（10）から、一人でのこされる場面（11）への移りかわりにおいて、2歳半以下のものは、より大きな不安を示したが、2歳半以上のものはかえっておちつきを取り戻した。すなわち、2歳半以下の子どもたちは、見知らぬ人への不安よりも、見知らぬ場所に一人でのこされる不安の方がより強いといえる。実験者Bにしがみついて、どうしても離れまいと泣くものも多かった。それに反して、2歳半以上の子どもたちは、2歳半以下の子どもたちに比べて、全体的に不安も少なかった。そして、見知らぬ場所や、そこに一人でのこされることに対する不安よりも、見知らぬ人に対する不安の方がより強く示された。最初彼らは、一人で部屋にのこされると、喜んでおもちゃで遊んだり、探索をしたりして、実験者Aがそばにいた時よりもおちつきを示した。そして、実験者Bの入室で少し不安になるが、再び一人でのこされると、おちつきを取り戻し、すぐにおもちゃであそびはじめた。特に3

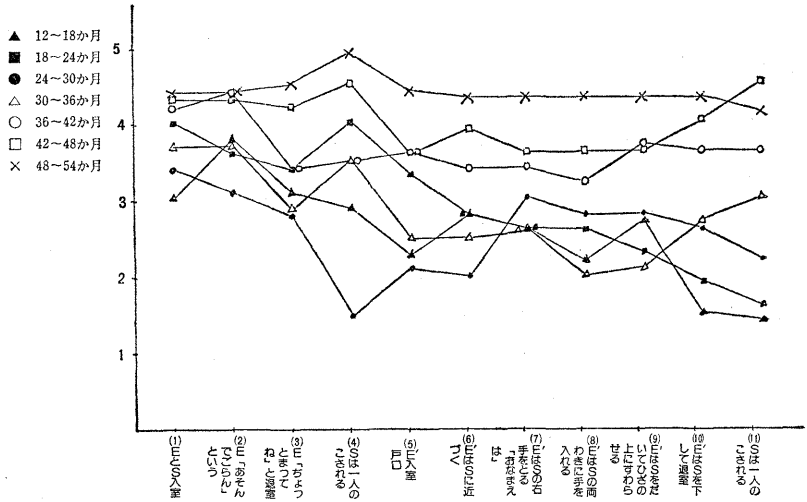

図8　見知らぬ場所における見知らぬ人への不安と，
1人残されることの不安状況における反応

歳以上になると、はじめからおわりまで、そのすべての反応において、あまり大きな変化を示さなかった。

Ⅲ　結論

以上の結果は、乳幼児の適応能力、不安克服能力の発達という立場から集団保育に参加する時期を考えた場合、現行の幼稚園における3歳就園が適切であることを裏付けるものであった。

実際の保育場面において、18～24ヵ月児が最も多くの分離不安と適応困難を示したことや、やや弱いけれども、それと同様な傾向が6～12ヵ月児、12～18ヵ月児、24～30ヵ月児にも見られたことは、実験場面において得られた、2歳半以下の乳幼児の著しい不安反応と共に、集団保育を受けるレディネスが、2歳半以下の乳幼児には、まだできていないことを示すものといえよう。入園後11週目位になってはじめて、おちつきをみせる18～24ヵ月児に関しては、集団保育の効果よりも、むしろ長期間不安を経験させることによる障害の方が重大であろう。

（聖和女子大学）